



Title	図案文字を用いた「漢詩」のグラフィック表現
Author(s)	Wang, Haojue
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

図案文字を用いた「漢詩」のグラフィック表現

WANG HAOJUE 京都芸術大学大学院在学

はじめに

長きにわたる文字の歴史の中で、特に漢字については、書道であれ、フォントデザインであれ、表現の過程で視覚的な美しさである「造形性」および内容と情報を伝える「機能性」を踏まえた取捨選択が行われてきた。グラフィックデザインの分野では、情報伝達が主要な機能である「本文書体」と、文字の形状や筆画等、視覚的な表現を豊かにすることで造形的効果を強めた「図案文字」が存在する。今回の作品では、文字の可読性を確保しつつ、手書きによる表現性を強調した図案文字を活用し、漢詩を視覚化している。

漢詩の伝統的表現

漢詩は中国古代の文化の象徴であり、漢字と同様に日本へ伝わった。何百年も経て今日まで伝えられてきた理由は、漢詩の言語表現の妙技や整然とした対句の魅力だけでなく、詩文が伝える感情が数百年後の読者の共感を引き起こすからである。漢詩は当時の事件と個人的な感情を記録し、歴史的な故事の引用、修辞的な語彙などで詩の感染力を増し、読者の共鳴を生む。これにより、詩を読む際に頭の中で視覚イメージが形成され、読者は詩人の立場にとなって、詩人の感情を体感する。このように、読者の共感を引き出す現象は他の文学形式でもよく見られるが、漢詩における文字数の簡潔さと、伝わる感情の強さとの対比は、漢詩の最大の特長の一つとなっている。

通常、書道を用いて漢詩を表現する場合、書家は筆墨の濃淡、筆画の粗細、字形の構造などを通

じて詩詞の情感や意境を伝える。書法作品には強烈な個人風格があり、書家の情感や詩詞に対する理解を直感的に表現することができる。同時に、書法作品は視覚的に高い芸術価値を持ち、観衆の注意を引くことができる。

しかし、図案文字を用いて漢詩を表現する方法には独特的な特徴と利点がある。まず、図案文字は手書きの方式を通じ、創意と芸術表現を結びつけ、文字を視覚的により豊かで多様化したものにする。また、図案文字は可読性を保持しつつ、形態、構造、装飾要素の変化を通じて、詩詞の情感や意境をより直観的に伝えることができる。この表現方式は文字の機能性を保持しながら、その造形性を強化し、観衆が詩詞を読むと同時に文字の美感をも楽しむことができる。

杜甫と「春望」

「春望」は唐の肅宗、至徳二年（757年）三月に作られた。前年六月、安史の乱の反乱軍が長安を攻め落とし、「大索三日、民間財資尽掠之」とあり、さらに火を放ち、繁栄していた都は廃墟と化した。八月、杜甫は妻子を鄜州の羌村に安置し、北へ向かう途中で捕らえられ、陥落した長安へ送られた。そこに至るまで既に半年以上が経過していた。暮春の時期に景色に触れ、悲しみに暮れてこの詩を創作した。杜甫は「春望」において深い感情も表現している。詩中の「時に感じて」や「別れを恨んでは」の言葉は、詩人が国家の命運を憂い、離別の痛みを深く感じていることを直接に示している。「烽火三月に連なり」や「家書萬金に抵

る」といった言葉は、当時の社会の動搖と人々の家族への思いと期待を暗示している。そして、「白頭搔けば更に短く、渾て簪に勝えざらんと欲す」は、詩人の内心の苦痛と無念を直接に描写している。

図案文字による視覚的表現

今回の作品では、図案文字を用いた漢詩のグラフィック表現を二部構成で提示する。第一部では、テーブル上に配置された小冊子において、杜甫の「春望」の各句を図案文字で視覚化している。この過程では、文字の可読性を維持しつつ、各句の核となる漢字を中心に据えたデザインを採用した。

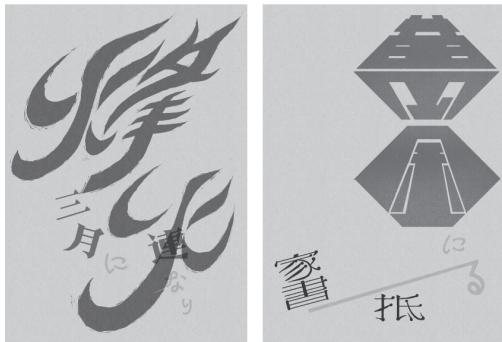


図1 「春望」小冊子の内容一部（筆者作）

具体例として、「烽火」の表現では、戦火の絶え間なさを視覚的に伝えるため、炎の要素を取り入れた。さらに、木版画の質感を参考にした手描きの技法を用いることで、詩文が内包する不安と残酷さを強調した。また、「家書萬金に抵る」の句では、「萬金」と「家書」の視覚的対比を通じて、家書の価値の優位性を表現した。このように、各句のテーマに基づいて選択された漢字のキーワードを用いて、計8枚の手描き作品を制作した。

第二部では、壁面に掲示されたA2サイズのポスター2枚を通じて、より抽象的な表現を試みた。これらのポスターは、小冊子の8句から抽出した1~2個のキーワードを再構成したものである。本研究では、有名な漢詩から抽出した少数の文字の組み合わせが、原文の連想と複雑な感情の表現に

どのように寄与するかを探究した。この考察に基づき、全詩を二分割し、図案文字を再構成してポスターを制作した。



図2 「春望」ポスターの表現（筆者作）

小冊子では平仮名や説明文を加えて可読性を高めたのに対し、ポスターではより簡潔な表現を採用した。この手法により、図案文字自体の美的価値をより直接的に伝達すると同時に、最小限の文字数で「春望」を再解釈し、観者に詩文が描く戦争と不安に満ちた世界観について、想像の余地を残すことを意図した。

結論

図案文字は伝統的な書道と比較して、グラフィックデザインの観点からより直観的に漢詩の感情や情景を表現できることが明らかとなった。文字の造形性と機能性の巧みな融合により、鑑賞者に新たな解釈の余地を提供し、詩の内容への深い理解を促進することが可能となった。小冊子やポスターなど異なる媒体の採用により、詳細な表現と抽象的な表現の組み合わせを実現し、漢詩の多層的な解釈を促進した。図案文字による表現方法は、漢詩の簡潔さと感情の強さを視覚的に強調し、現代的な文脈での漢詩鑑賞に新たな可能性を提供した。これらの発見は、今後の漢詩および古典文学の視覚化研究に新たな方向性を示し、伝統文学の視覚化における図案文字の独特な価値と可能性を示唆している。